

総合教育会議（令和7年度第1回） 会議録（議事要旨）

日時	令和7年6月24日（火） 16時00分～17時00分	
場所	久留米市本庁舎20階 第3委員会室	
出席委員	原口 新五（久留米市長）	
	井上 謙介（教育長）	江頭 理江（教育委員）
	内村 直尚（教育委員）	御厨 千秋（教育委員）
	富永 孝太郎（教育委員）	小田 まり子（教育委員）
事務局	平田 敬一（教育部長）	原武 泰将（総合政策部長）
	藤原 誠二（教育部次長）	四ヶ所 清隆（教育監）
	東野 淳（教職員課長）	大鶴 浩子（教育センター所長）
	深堀 尚子（総合政策課長）	
	渡辺 唯希（学校施設課長）	中島 幸弘（学校施設課計画主幹）
	飯田 智久（学校施設課設備主幹）	石橋 豊裕（教職員課人事管理担当課長）
	田中 浩之（学校教育課長）	下川 嘉満（学校教育課指導主幹）
	古賀 友理子（学校教育課学務主幹）	豊福 健一（学校教育課人権・同和教育担当課長）
	原 英治（学校教育課主幹）	平塚 淳也（学校教育課教育支援主幹）
	深田 将（学校保健課長）	小形 孝徳（学校給食共同調理場所長）
	新村 敏（教育ICT推進課長）	手島 玲子（総合政策課政策調整官）
報告者	矢野 邦彦（久留米市立南小学校校長）	
	古賀 一英（久留米市立青陵中学校校長）	

1 開 会

平田教育部長（開会宣告）

2 あいさつ

原口市長

3 報告事項

（1）流域治水に関する学校の取組について

平田教育部長 それでは、報告事項の（1）「流域治水に関する学校の取組について」を事務局より説明させていただきます。

教育部（事務局説明）

藤原次長

平田教育部長 事務局からの説明は終わりました。
ご意見やご質問があれば、お願いします。

御厨委員 防災学習会にて、田んぼダムの模型を活用して学習を行ったようですが、実際の田んぼダムは見に行かれたのでしょうか。

教育部 今回は教室で行う学習であったため、実際の田んぼダムは見に行っておりません。しかし、画像等を活用して、田んぼダムについて学習をしております。
藤原次長

御厨委員 今後も実際の田んぼダムを見に行く予定はないのでしょうか。

教育部
藤原次長 今のところは予定しておりませんが、フィールドワークを通じて実際に体験することは非常に重要であると考えています。

教育部
平田部長 農政部より田んぼダムの模型を借りて、教室に持ち込んで学習をいたしました。模型の上から水を流すと、子どもたちが模型のまわりを集まってきて、非常によかったと思います。

富永委員 企業と学校・行政が協働で「みんなで流域治水！」を行っているようですが、誰が主導しているのでしょうか。また、校区ごとに実施しているのでしょうか。

教育部
藤原次長 市が主導し、地域ごとの作業内容に応じて募集しております。市側は、都市建設部をはじめとした複数の部局に加え、総合支所も参加しております。

富永委員 どういった業種の企業が参加しておられるのでしょうか。

教育部
藤原次長 主に土木系の企業にご参加いただき、重機を提供していただくなど、市が実施できない専門的な作業についてご尽力いただいております。企業と市が一丸となって活動を行いました。

江頭委員 6月～7月は田んぼに水が入り、水門が開くことで、田んぼへ水を入れている水路や川の水嵩が上がっている時期です。降雨情報があつた際は、水路や川の水嵩を下げる予定はあるのでしょうか。

教育部
藤原次長 久留米はクリークやため池が多いため、天気の状態を見ながら、先行排水できる場所から排水し、少量でも雨水が貯まるような対策に取り組んでおります。

原口市長 久留米市にはため池が104個あり、そのうち約50個ずつを民間と市が管理しております。市が管理している約50個のうち、約半数は農業用水に利用しておりますが、残りの半数は農業用水とは関係がないものです。そのため、先行排水する際は、農業用水の用途でないため池で排水している状況です。
なお、久留米市には田んぼダムが300ヘクタールありますが、全ての田んぼダムに水が張ってあるため、手前のクリークへ、あらかじめ水のある程度排水しておくほか、農業用水の用途でないため池の水を排水する、貯水堀の水を減らす等の対応を行っております。農業用水に利用しているため池の水を落とすことができれば良いのですが、雨が降らなかったときに備えているため、実施できておりません。
また、久留米大学御井学舎のグラウンドを掘り下げる等の対応を行ったように、元は市全体で30万立米ほどの貯水量でしたが、今では140万立米もの貯水量になりました。とはいえ、貯水量が増加したからといって、万全の体制とはいえません。あくまでも警戒レベル3又は4の避難情報が出た際に、避難の時間稼ぎができるようなものです。しかしながら、先日の雨では、

久留米大学や合川町の御幣島地区に貯留地をつくり、貯水量を増やしたことが功を奏して、冠水の状況が大きく低減したように思います。

小田委員 防災学習として、アプリや仮想現実等を利用し、雨量や天気の変化に応じた体験ができる教材を導入している自治体があると聞いております。宮崎県延岡市では、そういった体験型アプリが開発されたりしているようです。子どもたちが興味や危機意識をもてるような、体験型の教材を導入することは検討しておられるのでしょうか。

平田教育部長 「見える化」だけでなく、流域治水の大切さを「分かる化」できるよう、学校にある端末を用いた教材について、情報収集をしていきたいと考えております。

3 報告事項

(2)「久留米市教育に関する大綱」及び「久留米市教育振興プラン」の計画期間の延長について

平田教育部長 次に、報告事項の(2)「久留米市教育に関する大綱」及び「久留米市教育振興プラン」の計画期間の延長についてです。事務局より説明させていただきます。

教育部 (事務局説明)
藤原次長

平田教育部長 事務局からの説明は終わりました。
ご意見やご質問があれば、お願いします。

(なし)

4 議題

久留米市の不登校に関する支援について

平田教育部長 それでは本日の議題である「久留米市の不登校に関する支援について」に進みます。

まず、事務局から市の不登校に関する支援の概要を説明させていただきます。そのあと、南小学校の矢野校長先生、青陵中学校の古賀校長先生に、不登校などの学校の状況や取組について、お話ししたいと思っております。

学校教育課 (事務局説明)
田中課長

平田教育部長 それでは、南小学校の矢野校長先生、よろしく申し上げます。

南小学校 (学校現場の状況報告)
矢野校長

<小学校での不登校>

小学校で不登校となる子どもには、一般的に以下のような傾向がみられることがあります。

- ① きょうだいで上の子どもが不登校だと下の子どもも不登校になる場合がある
- ② 音やまわりの目が気になる子どもや集団になじめない子どもなど特性が様々である
- ③ ゲームや SNS による生活習慣の乱れ
- ④ 保護者と子どもが十分に関わりを持っていない
- ⑤ 友達同士のトラブルや勉強についていけない 等

<学校現場の状況>

原因が多岐にわたり、子ども自身に不登校の原因がわからない中でも、児童一人ひとりに合わせたきめ細やかな対応が学校に求められている状況です。限られた職員数で決められたカリキュラムを、クラスという集団を基本とした指導が中心となる現場では、そうした一人ひとりのきめ細やかな対応が困難な場合もあります。

<校内支援教室について>

昨年度より始まった校内教育支援教室の存在は大変ありがたく感じております。南小学校では、3～4名の利用から始まりましたが、現在は9名の子どもが利用しております。教室には行けないものの、学校には行ける子どもたちにとって、安心して過ごすことができる居場所となっています。

<学校の対応>

学校では、相談体制や協力体制を整備しました。担任だけでなく、学年全体や、管理職、養護教諭も相談体制に加わり、風通しの良い仕組みになるよう工夫しました。また、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、家庭子ども相談課、児童相談所等ともスムーズに連絡がとれる体制を整えているところです。

平田教育部長

ありがとうございました。
つぎに、青陵中学校の古賀校長先生、よろしく申し上げます。

青陵中学校
古賀校長

(学校現場の状況報告)

<中学校での不登校>

成長もあるせいか、小学校に比べ、不登校になる原因が、一層見えづらくなっております。生徒自身にも不登校の原因が分かっていない子どももおります。学校として、不登校の原因を考えますが、家庭の状況や子どもの様子も様々で、原因の追求ができません。文部科学省が実施した、不登校児童生徒の原因に関する調査によると、単に無気力や学習不振など、不登校になる原因がはっきり特定できない子が全体の4割～5割を占めているようです。こういった状況の中、学校が原因の解明を行いたくとも、難しい状況であるため、苦慮している状況です。

<学校の対応>

不登校への対応として、朝の時間を大切にしています。担任が教室で出席している生徒の対応をする間、副担任は靴箱を見て、上靴がまだ残っている生徒を確認し、家庭に連絡をしております。保護者と学校の間でメールのや

り取りを行う運用が開始され、以前に比べるとスムーズに家庭への連絡ができるようにはなりました。しかし、毎日学校全体で十数件以上の家庭への連絡を朝だけでなく夕方にも行っているほか、場合によっては家庭訪問も行っているため、職員への配慮と、不登校への対応との両立が難しいです。

<対応の難しさ>

不登校への対応は、早期発見が大切であることから、青陵中学校では、校内不登校対策の生徒指導部会を毎週設けております。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、校区ごとの主任児童員も加わり、情報共有を図る場となっております。情報共有の場では、欠席状況がわかる資料を基に、早期発見に努めております。学校として、できる限りの対応を行っておりますが、家庭との連携がとれない場合もあり、不登校になる原因の根本の追求まで行うことができておりません。

平田教育部長 ありがとうございました。
それでは、お話いただいた内容を踏まえて、ご質問やご意見等があればお願いいたします。

内村委員 <考えられうる不登校の原因>

不登校は、生活リズムの乱れにより始まるものと考えております。朝に起床できず、学校を休みがちになることで不登校となり、不登校となることで不規則な生活をするため、より一層朝に起床できなくなる結果、不登校が続くという悪循環が生まれているかと思えます。

<不登校を減らす取組>

不登校を減らすための解決策として、大阪府堺市の中学校の先生が睡眠のリズムに着目し、睡眠を整えるための「眠育」を行いました。結果として、不登校を減らすことができたため、今では市内全ての小中学校で「眠育」を取り入れているようです。年間を通じて「眠育」の日を設け、睡眠についてクラスで意見交換を行い、睡眠について考えるきっかけづくりとするほか、毎日の睡眠を「睡眠日誌」として記録し、家庭にも共有することで、子どもが寝坊した日は「睡眠日誌」から原因を追求し、みんなで改善策を考える一助となっているようです。

<正しい睡眠リズムがもたらす効果>

朝起床できないために、不登校気味になっている児童生徒へ「眠育」を導入することで、睡眠のリズムを見直すきっかけとなり、結果として不登校が続くことを防いでいるようです。

<「眠育」を推進する自治体の取組紹介>

堺市で導入している「眠育」では、学校と児童生徒、家庭だけでなく、地域も介入して、みんなで子どもたちの睡眠を守り、不登校児童生徒への早期発見に努めておられます。少子化が進む中、市全体が一丸となって、子どもたちの成長や発達を見守っているようです。

御厨委員 成人に近づくにつれ、夜中にくる友人からの誘いを「親から怒られるから」といった、他人のせいにして断ることが難しくなるように思います。そうい

った実情がある中、「眠育」の一環である、睡眠日誌を書くという教育は、中学生や高校生の子どもたちが、夜中にくる友人からの誘いを断る良い口実になるように感じました。

内村委員 人間は生物学的に10歳から20歳にかけて夜型になっていくものですが、その中でも、夜にスマホやゲーム等の明るい光をみると、さらに夜型になり、朝起床できなくなるものです。生物学的にも夜型になる年齢の中、ぜひ「眠育」を導入し、睡眠日誌を書く等の教育を行うことで、夜型への歯止めをかける支援となるのではないかと思います。

富永委員 学校現場での対応が難しい事例がある中で、特に学校以外の機関で対応をしてほしい事例などはありますか。また、その事例はどういった事例が考えられますか。

青陵中学校
古賀校長 学校以外の機関として、久留米市が行っている校内教育支援教室や、らるご久留米があるほか、今では民間のフリースクール等も出てきております。しかしながら、学校現場での対応が難しいからこそ、学校以外の機関へつなごうたいものですが、そこにつなぐまでが難しい状況です。

内村委員 らるご久留米の利用や、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの利用は、不登校を改善していくための一つの解決方法だと思います。しかし、そういった環境を利用してもなお、周囲の目が気になり、改善していかない子どもには、医療が介入していく必要があるかと思います。ADHDやアスペルガーといった診断がつき、適切な治療を行うことで、症状が緩和し、不登校の改善につながると考えます。しかしながら、保護者が子どもを医療につなげることに高いハードルを感じている場合もあるため、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、らるご久留米といった、学校以外の機関が積極的に医療を介入させていく手法が理想的だと思います。不登校の児童生徒にとって安心できる居場所づくりをするためにも、医療の介入は必須であると感じます。

青陵中学校
古賀校長 学校としても医療につなげていきたいと思っております。今までも、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の紹介をしておりましたが、保護者自身が壁を感じているケースも多いです。保護者の理解を得るために、学校現場が相当な時間と労力をかけて説明をしておりますが、それ以上に不登校の生徒が増えているため、なかなか対応が追いつかない状況です。

内村委員 保護者にとって、心療内科や精神科の敷居が高く、子どもを連れて行きたくないという思いはあります。小児科だとまだ連れて行きやすいかと思えますので、まずは子どもの心の問題、思春期の心の問題を診察できる小児科に連れていき、小児科を経由して、専門科へつなぐことも一つの手法であると考えます。なお、今後は「睡眠科」という専門科ができる予定ですので、「小児科睡眠科」ができれば、より一層保護者にとって、医療とつながる敷居が低くなるかと思えます。

江頭委員 市全体で一斉に始めることは難しいにしても、不登校児童生徒の多い小学校、中学校を1校ずつ選定し、試験的に「眠育」をぜひ導入してほしいと思います。睡眠日誌を導入すること自体、予算はかからないと思うため、家庭も巻き込んで睡眠リズムをみんなで考えるきっかけとなってほしいです。

内村委員 睡眠日誌をつけることで、結果的に家庭で抱える問題が見えてきます。学校が家庭へ直接介入することは難しいものでも、睡眠日誌を通して子ども自身の悩みや苦しみがわかり、解決の一助となると考えます。

平田教育部長 市長並びに教育委員の皆様、貴重なご意見ありがとうございました。
また、お二人の校長先生からは、貴重な学校現場のお話をうかがうことができました。

それでは以上をもちまして、令和7年度第1回久留米市総合教育会議を終了させていただきます。ありがとうございました。